幼稚園の源流を求める旅

森有礼の第二次在米時代(9)

教育への具体的視座

国吉　栄

森有礼由来の書籍群

イェール大学言語学教授ホイットニーに宛てた手紙の中で、アドルフ・ドゥアイは森有礼への仲介を懇願し、森に紹介してもらうために自分の英語の本をすべてシュタイガー社から送らせるよう指示したと述べていた。

ドゥアイの英語教本は計五巻のシリーズで、国立国会図書館に一巻と五巻が現存する。一巻は製本し直されているが、五巻はそのままで、表紙裏に「東京書籍館」のシールがある。ドゥアイは未公刊自伝の中で、それらの販売数が少なく、ほとんど生活を潤さなかったと嘆いているが、米国内にもわずかしか残っていない同シリーズが、太平洋を隔てた東京書籍館時代の日本に所蔵されているなど、通常では考えられないことなのである。

英語教本と同じ年に出版された彼の*The kindergarten*第四版も同図書館に収蔵されている。関信三が翻訳し、本邦初の完訳幼稚園書となった『幼稚園記』の原典は、森有礼を経由してわが国にもたらされたものであった。

ドゥアイ書簡の発見は、わが国の幼稚園のテキストとなった原典の流入ルートを明らかにした点で、幼稚園史研究において一定の意味がある。関信三研究に携わった者として個人的にも感慨深い。しかしさらに広い視野で見るならば、森が米国から持ち帰った書籍が、それとは明示されないまま、国会図書館の蔵書になっていることが具体的に明らかになったことのほうが、より重要であろう。森の大量の書籍は、商法講習所（一橋大学の前身）の創設資金をつくるため文部省に売却されたと伝えられているが、その事実を含め、森が「図書館」に果たした役割はいまだ全容が解明されていないからである。ドゥアイの複数の著作の存在は、森が持ち帰った書籍群が国会図書館にあることの具体的例証なのである。

『新修森有礼全集』に収録された二通のシュタイガー宛森書簡も興味深い。「十九日付お手紙拝受。ご親切に送ってくださった本もありがたく受領しました。これらの書籍は、夜明けと進歩に向かって苦闘しているわが国の男女にとって間違いなく有益なものです。ご恵贈くださるという地球儀もありがたくお受けします。江戸に設立される図書館の目立つ場所に置かせていただくことになりましょう」（一八七三年二月二八日）。「日本文学に興味をもってくださるのを大変うれしく存じます。（略）江戸の書店、瑞穂屋卯三郎氏と直接連絡をお取りになると、迅速に満足のいく結果が得られると思います。お手紙は瑞穂屋に送り、その件についてあなたから連絡がくるであろうと伝えておきましょう」（同年三月十四日）。

森は取引窓口として旧知の瑞穂屋を紹介した。現在国会図書館には、森の帰国後に出版された幼稚園文献もシュタイガー社のシール付で存在していることから、瑞穂屋と同社のルートが、ある期間機能していたことは確実である。同図書館にはこのルートで輸入されたそれ以外の分野の文献も多数存在すると推測される。

管見ながら、同図書館には「森有礼旧蔵書目録」等に登載されていない森のサイン入り旧蔵書も散見される。現国立国会図書館蔵書における森有礼の多様な貢献が明らかにされることを願う。

「学制」の翻訳

特筆すべきことと思うが、森は明治五（一八七二）年に公布された学制をいち早く英訳している。同年版の教育局年報には、「日本公使森氏のご好意により」として早くも学制の翻訳が掲載されているのである。彼は「新しい学校法の目的は、あらゆる階層において、男であれ女であれ、一人も無知の中に置き去りにしないことである」と力強く宣言した。すでにこの時期に、彼が全国民を視野に入れた学校教育体系に強い関心を抱いていたことの具体的表れとして注目に値する。

幼稚園との関係で取り上げたいのは、小学校の一種として学制に掲げられていた「幼稚小学」がinfant-schoolと訳されていることである。英国で創始されたinfant-schoolは米国にも渡り、ボストンを含む幾つかの都市に存在していたが、それほど一般的な施設ではなかった。しかし森は確実にその語を知っていたのである。

大変興味深いことにエリザベス・ピーボディーは著書*Kindergarten Guide*の一章冒頭に次のように述べている。「幼稚園とは何か。私はそれを否定形で答えよう。幼稚園とは、母親が働いている間に子どもを事故や悪習から守るための古めかしいinfant-schoolではない（私が言っているのは、ペスタロッチーのものではなく、わが国や英国で行われているinfant-schoolのことである）」。

のちに幼稚園の創設を太政官に願い出る田中不二麿は、岩倉使節団の教育担当理事官として英国を視察中、ロンドンのinfant-schoolで幼稚園遊具恩物が「授業」の合間の息抜きとして使われているのを見て、infant-schoolと幼稚園を混同してしまった。彼のこの誤認はわが国の幼稚園の形に甚大な影響を及ぼすことになるのであるが、森は両者の違いを認識していたのである。

学制の翻訳でもう一つ注目したいのは、小学校の教科の最後に掲げられていた「唱歌」についてである。当時は指導者も教材もなかったため、「当分之ヲ欠ク」と付記された。森は唱歌をsinging、付記の部分をsinging, (the last-mentioned not for the present.)と訳している。

ところで森が二人の少女をニューヘイヴンに連れていった時のことである。森は高校で音楽の授業を見学した。その模様を報じた地方紙がある。記事によれば、生徒たちは板書された初見の曲を歌い、また歌曲集からなじみのある曲を何曲も歌った。生徒が弾くピアノに合わせての行進もあった。森は大変喜んで、美しい英語で感謝の言葉を述べた。森有礼は、間違いなく学校教育における音楽教育の実態を親しく知るわが国最初の人である。

これより少し前、全米教育協会大会参加後に、森が、のちに音楽取調掛として招聘されるメーソンを日本に派遣する約束を音楽関係者と交わした、という資料が報告されている（安田寛『唱歌と十字架』1993）。さらに同じころの*Times*紙には次のような記事がある。「日本の駐米公使は、同国に学校を設立する計画の具体化を進めている。（略）音楽と図画も科目として採用されることになるだろう」。ここに詳細を記す紙幅はないが、考察すべき点が多い記事である。singing, not for the present、しかしやがて、と彼ははっきり考えていたはずである。

森は開拓使派遣の少女たちにピアノを習わせていた。その一人、永井繁子がヴァッサー・カレッジ音楽科を卒業して帰国し、黎明期のわが国の音楽教育に携わったのはその大きな成果であった。ハリスのコロニーではハリスの詩に曲をつけた賛美歌が歌われていた。ボストンのキンズレー家では夫人の歌う賛美歌に聞き入った。音楽の授業も心から楽しんだ。森は当時の日本人には珍しく、洋音楽に対してまったくアレルギーをもっていなかった。

森の帰国準備で目を引かれるのは、輸送品の中に、大量の書籍に加えてピアノがあったことである。彼はピアノの輸送に千ドルの保険をかけた。学制に対する深い関心。それを実現させるための具体的方策。教育を社会の隅々まで行き渡らせようとする熱意。「唱歌当分之ヲ欠ク」現状を看過していなかった彼が、幼稚小学も名称を訳しただけで放念したはずはない。音楽の授業を実現化するために具体的方策を探ったように、学齢未満児の教育についても考えを巡らせていたことであろう。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）